

古川に沿った地は自然堤防が著しく発達した所です。ことに小林村の鎮守である香取神社から、真言宗東福寺にかけては小山を思わせるような砂丘を形づくっています。今は区画整理で山が平にならされたため、砂丘の面影はわずかにしかみられません。

大袋地区

〈大袋村〉

大袋村は、明治二十二年（一八八九）、恩間・大竹・大道・三野宮・大林・大房・袋山それに恩間新田村の八カ村が合併してできた旧村です。この村名は大竹・大道・大林などの「大」と袋山の「袋」を重ねたものです。このうち恩間新田は、江戸時代は恩間村の中に含まれていましたが、明治四年（一八七二）に恩間村から分離して独立した村です。また、袋



元荒川に架かるメ切橋（南荻島）

でしたが、その後武蔵国埼玉郡に入った所です。このほか、元荒川の付け替えて、荻島村の一部が川の東岸になった所があります。この新川によって荻島から孤立した集落は、メ切りの地とも呼ばれました。本村との交通上、新川に架けられた橋もメ切り橋と呼ばれていました。メ切りとは川の付け替えて、もともと流れていた川筋がメ切られたという意味です。

〈袋山と恩間〉

袋山の地名は、元荒川が袋のような形でこの地を囲むように流れていたこととこの地に積み重ねられた川砂が山のように高くなっていったことから、袋の山と呼ばれたといわれています。この袋山は、新田に開発された元荒川の古川を除いては、すべて畑地で、桃や梅の産地として知られていました。

恩間は、もともと袋山とは元荒川を隔てた対岸の地でしたが、今は地続きの地です。恩間は、古く

〈大房と大林〉

大房（現在の北越谷周辺）や大林は、元荒川が曲流する辺りに位置している地で、袋山などとともに自然堤防のよく発達した地域です。その多くが畑地でしたが、特に桃や梅の名所として有名な所で、歌川広重の絵にも描かれています。このうち大房の真言宗浄光寺



越ヶ谷古梅園

の境内には、古梅園という観光のための庭園が設けられています。昭和十一年（一九三六）には、俳人の高浜虚子がここにきて俳句を詠んでいます。越谷梅林公園や浄光寺を除いては、梅はすっかりなくなりしましたが、元荒川堤には桜が植えられ、桜の名所になっています。

ところで大房の地名ですが、大房の「フサ」は笹とか萱がたくさん生えている場所を指すといわれますので、古いころこの地には笹や萱がふさふさといひ茂っていたのかもしれない。ここには海道内・沼田・沼向などの小字がみられます。海道内はもちろん日光街道がそこを通っていたことから付けられた名です。

大林の地名は、詳しいことは不明ですが、今でも松の木などの樹木が自然のままに生い茂っている所があります。現在、ここは、明治四十一年（一九〇八）に開設した宮内省（現在の宮内庁）の埼玉鴨場となっています。小字には海道西・海道東といった名があります。

すが、これは日光街道を中心とする西の方、東の方ということでしょう。

〈大竹・大道・三野宮〉

大竹・大道・三野宮は、同じく元荒川に沿った村々で、江戸時代は岩槻藩に属していました。このうち大竹の地名は、おそらくもうそう竹のような大竹が茂っていたことから名付けられたものでしょう。ここには堀内などの小字があります。堀内は、古い時代、構堀といつて堀を巡らせた豪族などの屋敷内を、堀の内と呼びましたので、昔ここに豪族が住んでいたとも考えられます。

大竹の隣は大道です。この大道の地名はよくわかっていませんが古いころ立派な街道がここを通っていたことから名付けられたのかもしれない。

三野宮の地名もはっきりしませんが、古い時代、武蔵国とか下総国などの国の国司（長官）に任命さ

は「忍間」とも書かれ「おま」とも呼ばれていました。この地名は、荒川（元荒川）が押し回している地ということで「おしま」といわれましたが、いつか「おんま」と呼ぶようになりました。この地は古くから開けた地で、鎌倉時代の金沢称名寺文書の中に「新方のうちおま」の名がみられます。

この地には、江戸時代の国学者渡辺荒陽や村田春海の養女になった歌人の村田多勢子などが出ている旧家渡辺家があります。恩間新田は、この渡辺家の祖先が開発した地といわれています。また、恩間は江戸時代には岩槻藩に属していましたが、この村の中ほどに天神池と呼ばれる八反歩（約八〇メートル）ほどの池があり、毎年領主からこの池の魚をとることを命じられていたといわれます。この池も今は埋め立てられてその面影は残していません。

れた人は、まず、主な神社に参拝するのがしきたりでした。この国司が参拝する順序で一の宮・二の宮と呼ばれましたが、ここには国司が参拝するような大きな神社は見当たりません。一説によると元仁元年（一二二四）、源頼朝の妻の政子が、この地に稲荷山一乗院という寺を建てたと伝えられています。その後、応永十一年（一四〇四）に、時の将軍足利義満の三男である三の宮がなくなりまし。そのとき三の宮稲荷大明神をここに祭ったことから、この地を三の宮と呼んだといわれています。なお、一乗院には、徳川家康の別荘であった神奈川御殿の建具の一部が使われているといわれています。また、この地からは日本一の力持ちといわれた三ノ宮卯之助という人物が輩出されています。

荻島地区

〈荻島村〉

荻島村は、明治二十二年（一八八九）に、野島・長島・南荻島・北後谷・西新井・砂原・小曾川の七カ村が合併してできた旧村です。このときの村名は、合併村のうち一番大きくて中心的な村であった南荻島の南を除いて付けられたものです。この南荻島や北後谷の南や北は、明治十二年（一八九九）の郡制施行のとき付けられたものです。これらの村のうち野島・小曾川・砂原それに荻島の一部は元荒川に沿った地で、長島は古いころの綾瀬川沿いの地、西新井や後谷は、荒川（元荒川）が、もともと綾瀬川に乱流していたころの河道沿いに連なる村です。古くは武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷の中に含まれていました。

あるいは岸を指す言葉ですが、ここはそのいずれにもあたっていません。

西新井は、荻島の西隣にあたります。西新井の「アライ」は新しい開発地の集落を指すといわれますので、元荒川の西にあたる開墾地の里ということで名付けられたとみられます。ここには堀の内・立野などの小字があります。堀の内は前にも述べた通り豪族などの屋敷があった所を指しますので、ここにも豪族のような人が住んでいたとみられます。

長島は、古いころの綾瀬川の河道跡に沿った所で、細長い集落をなしていたことから細長い耕地、すなわち長島と呼んだのででしょう。ここはもと西新井村の新田地で、西新井新田と呼ばれていましたが、元禄八年（二六九五）に、西新井村から独立して一村をつくった所です。ここには寺浦・中通などの小字がみられます。このうち寺浦の「ウラ」は、北東の方角を指す言葉だといわれ、「テラ」は平な地ともいわれますので、長

〈野島・小曾川

砂原・北後谷〉

野島の「シマ」は、水に囲まれた島ということだけでなく、耕地を指すそうですので、野の中の耕地ということから起こった地名のようです。この地には貞観二年（八六〇）という古いころの創立を伝える、野島山浄山寺という曹洞宗の寺院（もとは天台宗）があります。



浄山寺

島の中でも北東にあたる平な所ともみられます。

出羽地区

〈出羽村〉

出羽村は、明治二十二年（一八八九）に、大間野・七左衛門・越巻・谷中・神明下・四町野の六カ村が合併してできた村です。この村名は、その昔、越ヶ谷郷の豪族会田出羽が、当時一面の沼沢地であった綾瀬川べりの地を開発するため、排水用の堀を掘りました。人々は、この堀を出羽堀と呼びました。そして出羽堀を掘ってこの地域の開発のもとをつくった会田出羽をたたえ、その名をとって出羽村としたものです。

江戸時代は、武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷の中に含まれていました。このうち早くから開けていた元荒川べりの四町野や神明下を除いては、元和から寛永年間（一六一五

江戸時代には「野島の地藏さま」として有名で、たくさんの方々が訪れていました。小字には川端などの名があります。

野島の隣にあたる小曾川は、同じく元荒川べりの地です。小曾川の「ソ」は石や砂という意味があるそうです。また「カワ」は側、すなわちそばとも解されていますので、砂地のそばの地、ということから付けられた名とみられます。ここには前原・沖田などの小字があります。

砂原も小曾川と同じく砂地の地から砂原と呼ばれたのででしょう。ここには沼ノ方という小字もありますので沼があったとみられています。

後谷は、元荒川と綾瀬川の間にあたる地です。古い時代、荒川（元荒川）が荻島から西新井を通って綾瀬川へ流れていたことがありました。この古い流れに沿った自然堤防上に、後谷や西新井の集落が連なっています。その前後は水田に適した一面の湿地でした。ことに後谷の後方は一面の湿地、

（四四）にかけて、神明下村の地方代官会田七左衛門政重によって開発された所です。当時は槐戸新田、あるいは七左新田と呼ばれていました。元禄八年（二六九五）に、谷中・越巻・七左衛門・大間野の四カ村に分けられました。槐戸という地名は、槐の木が自生している川のほとりの地ということから付けられたものでしょう。なお、この地の開発者会田七左衛門政重は、会田出羽の養子といわれ、のち神明下村に分家しましたが、関東代官伊奈半十郎忠治の家臣としてたいへん活躍した人物です。

〈四丁野・神明下・谷中〉

四丁野は四町野とも表記され、条里制の遺名ともいわれますが、四町歩ほどの耕地であったからともいわれています。越ヶ谷の久伊豆神社や越ヶ谷中町の浅間神社なども、もとは四町野の中にあつたものです。また、越ヶ谷本町の市神（市場の神様）神明社も、江戸

つまり「谷」であつたのでこの地名が付けられたのでしょう。ここには、外谷・内谷など谷のつく耕地地名が多いことから、全体に低い地であつたことが考えられます。

〈南荻島・西新井・長島〉

荻島の地名は、荻島の「シマ」が耕地を指すといわれますので、元荒川べりの荻（水辺に生える芦の一種、すすきに似た花をつけます）の茂った所の耕地とも解されます。

出津という小字は、現在、文教大学や住宅地になつている所で、ここは元荒川が屈曲した所で、もとは一面の河原、すなわち遊水池でした。遊水池とは大雨などで川の水が増えたとき、ここに水をためて流れを緩やかにする所です。現在、出津と書かれています。その地形からみて川洲が出張った所であり、出洲が出津と書かれるようになったとみられます。ちなみに津とは渡し場とか港、



迎摂院 (こうしょういん)

時代のはじめ四町野の神明社を移したものとされています。ここには押切・御縄先・神明などの小字がみられます。このうち御縄先の御縄とは、検地（土地の検査）のことを指したもので、縄先とは、はじめに検地を受けた場所です。また、押切は、元荒川の堤防が大水で切れた所をいいました。神明は、もちろんそこに神明社があつたことから付けられた地名です。

神明下は、神明社が祭られているその下の地ということから名付けられた村名といわれ、会田七左衛門家代々の墓所もあります。

谷中は元禄八年（一六九五）に四町野村から分村した村で、ここも会田七左衛門政重による開墾地です。この中に中西・寅沖・大作などの小字があります。このうち寅沖の「オキ」はこの場合、起の当て字で、寅の年に開発された所とみられます。

〈七左衛門・越巻・大間野〉

七左衛門（現在の七左町）は、この地の開発者会田七左衛門政重の名をとって付けられた村名です。会田七左衛門政重は、七左衛門村に真言宗の観照院などを建てたほか、越巻村（現在の新川町）に真言宗の満蔵院、神明下村に真言宗政重院などを建てています。さて、七左衛門には上・中・下・屋敷前・屋敷裏・屋敷内などという小字があります。屋敷前とか屋

敷裏という小字は特定の人の屋敷を中心とした呼び方です。ここは、この地域を開墾するとき設けられた陣屋（役所の出張所）のあった所とみられますが、のちに名主の屋敷地になったので、屋敷と呼ばれたのでしよう。また、七左衛門村は、もともと沼沢地であっただけに内沼・細沼・大沼など沼にちなんだ小字が多くみられます。

七左衛門の西隣が綾瀬川に面した越巻（現在の新川町）の地です。地名は、越巻の「コシ」が山などのふもととかそのそばとかを指し、「マキ」は人家の集まった所といわれますので、綾瀬川の対岸、鳩ヶ谷から戸塚、大門に連なる台地のふもとの集落から付けられた名とみてよいでしょう。現在、越巻は、新川町と改名されていますが、それは新川と呼ばれる末田大用水路がここを流れていることで付けられた名です。

大間野は、綾瀬川に沿った地です。その地名は、大きな耕地の間にある集落ということから付けられた名と考えられます。ここには

小字がみられます。このうち街道は日光街道の通じている所、鎌田は釜の底のように深い田、すなわちくぼんだ田、塚田は、田の中に塚があったことから、このように呼ばれたとみられます。

〈蒲生〉

蒲生は、古綾瀬川（もとの綾瀬川の主流）に面した所で、水草の蒲がたくさん生えている地ということで付けられた地名とみられています。また一説には、古い時代戸塚村（現在の川口市）にあった慈輪山という寺の領地が美濃国（現在の岐阜県）蒲生郡のなかにありましたが、この寺の領地が、この地と交換されました。このとき慈輪山では、もとの領地の名をとって、この地を蒲生と名付けたともいわれます。このほか蒲生は加茂とも呼んでいました。「カモ」とは蒲の生えている水辺のことといわれますので、加茂も蒲生も同じ意味であるようです。

登戸は「ノボット」とも呼ばれ、川を渡る所を指すともいわれますので、古い時代、ここに川が流れていたか、大きな池や沼があったともみられます。一説によると、登戸は越ヶ谷から江戸へ登る戸口から起こった地名で、戸は里のことだとしているものもあります。ここには街道・塚田・鎌田などの

川東・川西という小字があります。この川とは大間野を二分した新川（末田大用水路）を指したものです。

蒲生地区

〈蒲生村〉

蒲生村は、明治二十二年（一八八九）に、蒲生・登戸・瓦曾根の三カ村が合併してできた村で、この村名は、旧蒲生村が三村のうちでもっとも大きくて中心的な村であったことから蒲生村を新村名にしたものです。古くは武蔵国埼玉郡越ヶ谷郷に含まれていましたが、江戸時代には武蔵国埼玉郡八条領の中に組み入れられていました。この地域は、市内でも南西にあたる地で、この中ほどを南北に日光街道が通じていました。このうち瓦曾根は元荒川沿い、登戸は谷古田用水路沿い、蒲生は綾瀬川と古綾瀬川沿いにあたっていている地で

ここには八幡・明德・打分・下茶屋・上茶屋・奉行地などの小字があります。このうち八幡はここに八幡神社があったことから起こった名とみられます。また、明德は現在「めいとく」と呼んでいますが、おそらく、もとは「アケト」と呼んでいたとみられます。アケトとは「アクト」、つまり土砂が流れこんでできた土地ともいいますので、この地はもと低い所で、周囲から土砂が流れ込んでできた場所ともみられます。

また、上茶屋・下茶屋という所がありますが、それはここにお茶屋があったので付けられた地名です。ここは、越ヶ谷宿と草加宿の中間にあたる日光街道沿いの地で、旅人が一休みするためのお茶屋が設けられていました。このような所を「立場」と呼んでいます。また、奉行地という小字は、おそらく宝暦十二年（一七六二）に、土地の争いから一村検地（一つの村の土地の検査）が行われましたが、このとき検地奉行がここに奉行の出張所を置いたので、それか

す。古綾瀬川とは、蒲生の南端の藤助河岸から東に向かつて流れていた、もとの綾瀬川の流路です。今は川柳の伊原新田に、その流れの面影を少しとどめているだけです。



藤助河岸跡に復元された小屋

ら奉行地と呼ばれたとみられます。打分もそのときの検地で、土地が分けられたことから打分と呼んだのでしよう。

大相模地区

〈大相模村〉

大相模村は、明治二十二年（一八八九）、西方、東方、見田方・南百・別府・四条・千疋の七カ村が合併してできた村です。新村名は、古い時代、西方・東方・見田方などの地域が大相模郷と呼ばれていたことから名付けられたものです。この大相模の地名は、西方（現在の相模町）の大聖寺（大相模の不動尊）の寺伝によると、天平勝宝二年（七五〇）に、良弁という高僧が相模国（現在の神奈川県）の大山で、一本の櫨の木から二体の不動尊を刻みまし。そのうち元の木で彫られた不動尊が、この地に祭られたので大の相模と

呼ばれるようになったといま
す。古いころは、西方村などが武
蔵国崎西郡（埼玉郡）大相模郷、
それに千疋・別府などが崎西郡八
条郷の中になりましたが、江戸時
代には武蔵国埼玉郡八条領に属し
ていました。いずれの地も元荒川
やその下流中川に沿った地域にあ
たります。

〈西方・東方・見田方〉

西方は、大相模郷のうち西の方
にあたる地ということで、西方と
名付けられたようです。この地に
は古い創建を伝える大相模の不動
尊や大きな勢力をもっていたとい
われる山王社（現在の日枝神社）
などがあります。また、ここには
藤塚・番場・馬場野などの小字が
あります。このうち藤塚という地
名は、藤塚の藤が「トウ」からき
たものといわれます。そして「ト
ウ」は湿地を表すといえますので、
湿地の中に塚があったことから藤
塚と呼ばれたのかもしれない。

さらに、馬場野の近くに番場とい
う地があることから、古いころこ
の辺りに、土豪のような武士が住
んでいたことも考えられます。

東方（現在の大成町ほか）は、
大相模郷の東にあたる地から名付
けられたとみられます。この地に
は武蔵七党と呼ばれた、七つの武
士団のうち、野与党に属した大相
模次郎能高が住んでいたといわ
れ、古くから開けていた土地とい
われています。ここには茨田など
の小字があります。茨田の「イバ
ラ」は荒地を指すといわれますの
で、あまりよくない田んぼを指す
といわれています。

見田方は、「ミタ」というのが
本田を指すといわれますので大相
模郷の中でも本田があった方とい
うことから、このように呼ばれた
のかもしれない。江戸時代は、
見田方をはじめ東方・南百・別
府・四条・千疋・麦塚それに柿ノ
木（現在の草加市）の八カ村は忍
藩（現在の行田市）の飛地で、柿
ノ木領八カ村と呼ばれていまし
た。柿ノ木村がこのうちで一番大

きな村であったからです。この八
カ村を取り締まった割役名主は、
代々見田方村の宇田家が勤めてい
ました。

また、見田方の地からは、古墳
時代後期の集落とみられる住居跡
が発掘されました。この見田方
地には、内輪・辻・土腐・曾根な
どの小字がみられます。このうち
土腐は、水の深い田、曾根は砂地
の所、辻は十字路の所、内輪は半
円形の所ということから起きた名
といわれています。

〈南百・四条別府・千疋〉

南百は、難渡とも書かれ、川を
渡るのに難しい所ということから
付けられた名ともいわれます。ま
た、「ナンド」の「ド」は川の合
流点を表すといわれ、大相模の南
の方の川の合流した場所というこ
とで名付けられたともみられま
す。事実、ここは元荒川と古利根
川が合流する所で、もとは渡船場
であった所です。ここには深田・

曾根・沖などの小字があります。
このうち深田は、土浮や土腐と同
じく水の深い田のことです。

また、南百から吉川に通じる中
川に架けられた橋は、現在、吉川
橋と呼ばれています。もとは
「トクエバシ」と呼ばれていまし
た。これは、明治時代の終わりご
ろ、吉川の徳江という人が木橋を
架けて交通の便をはかったので、
この橋の名を「徳江」という人物
の名をとって付けたものといわれ
ています。当時、この橋を渡ると
きは渡し賃をとったといえます。
その後、昭和の初めごろこの橋を
埼玉県が買い取りました。現在の
橋は昭和八年（一九三三）に架け
替えられたものだそうです。

四条は、条里制の遺名ではない
かといわれています。ここには待
田・根郷・長島などの小字がみら
れます。このうち長島は細長い耕
地、根郷は四条の元になった集落
の地、待田は町田といって、一團
いの田から起こった名とみられて
います。

別府は別符とも書かれます。古

い時代、時の政府から特別に許し
をえて開発された地を別符田と呼
びましたが、この別府の地がそれ
であるか詳しいことは不明です。
ここには南谷・北谷などの小字が
あります。市内でも最も南はずれ
の千疋は、千匹とも書かれます。
「セン」は川で「ヒキ」は低いと
も解され、川に沿った低い土地か



宇田家長屋門（現在はありません）

ら起こったとみられています。こ
こには芦田・三枚田・浮沼などの
小字がみられます。現在、南百・
四条・別府・千疋の地は、東町何
丁目、それに一部は川柳町何丁目
と呼ばれています。

川柳地区

〈川柳村〉

川柳村は、明治二十二年（一八
八九）に、伊原・麦塚・柿ノ木・
青柳の四カ村が合併してできた村
です。新村名は柿ノ木の「カ」伊
原の「ハ」青柳の「ヤ」麦塚の
「ギ」をとって「カハヤギ」とし
たともいわれますが、実際は「カ
ワヤナギ」と呼んでいます。その
後、川柳村は、昭和三十年（一九
五五）八月に草加町と合併しまし
たが、この川柳村のうちの麦塚・
伊原・上谷が同年十一月境界を変
更して越谷町に編入されました。
この地域は、古綾瀬川や東京葛西

用水・八条用水に沿った所です
が、その昔、利根川などが乱流し
ていた地で、砂地の所も少なくあ
りません。

〈麦塚・伊原〉

麦塚（現在の川柳町ほか）は、
市内でも南端にあります。地名の
起こりは砂地が「ムキ」出しにな
っている所に塚があったため「ム
キヅカ」といい、それが「ムギヅ
カ」になったようです。ここには
樟子山・蔵屋敷などの小字があり
ます。このうち樟子山の「シヨウ
ウ」は小ともとられ、小さい丘の地か
らこのように呼ばれたとみられま
す。また、蔵屋敷は、ここに米を
貯えておく蔵があったからとみら
れています。

伊原は、伊原本田と伊原新田と
に分かれています。このうち伊原
新田は古綾瀬川と東京葛西用水に
沿った地です。地名は「イバル」
すなわち「威を張る」といって、
新しく開発された土地を自分の土

地であると主張することから起こ
った名ともみられています。ここ
には鎌田・大角屋敷などの小字が
あります。

「わたしたちの郷土こしがや」から



鎮守のもり

どこの地区でも見られるお寺や鎮守のもりは、信仰の場であると同時に木陰を作り、子どもたちの遊び場ともなり、地域のコミュニティの場となっています。



元荒川の桜堤

北越谷の元荒川堤に植えられた桜並木は、延々2kmにわたり見事な花をつけ、広々とした河川敷と一体となり、市街地の中の行楽の場となっています。



眺望が開け 富士山の見える風景

富士山が見えることは、開けた眺望のシンボルであり、以前に比べて少なくなりましたが、富士山や日光連山を遠望できる場所は市内にまだ残っています。



古利根川の 緑豊かな水辺

市の東部を流れる古利根川の流域は、比較的人の手が加わらず、自然堤防上の緑が広い川面に映り、見る人の心を和ませます。

いつまでも

残したい風景

越谷アムニティ八景（画・大徳幸雄）昭和57年に市民投票で決定



豊かな水をたたえた 田園風景

青々と広がる水田の間を縦横に流れる大小の水路と、そこに植えられたハンノキ、点在する農家などは市を代表する景観の一つです。



元荒川と 葛西用水の開けた水辺

元荒川の宮前橋から市役所わきを経て瓦曾根堰の水門にかけては、葛西用水が隣接し、川辺は釣りを楽しむ人、お弁当を広げる家族連れなど市民の憩いの場となっています。



久伊豆神社の社叢

参道の長い松並木とフジの花、うっそうと茂る樹木を背にした朱塗りの社殿、境内に残された越谷吾山や平田篤胤の遺跡など歴史的雰囲気、緑がよく調和し、荘厳な趣があります。



古い家並・宿場の面影

旧日光街道沿いの越ヶ谷や大沢には数は少なくなりましたが、蔵造りの家や千本格子の家が見られ、古い宿場の面影を残しています。

植物

水と緑に恵まれた越谷では身近なところに自然が残っています。四季折々に美しい花が咲き、訪れる人を優しく迎えてくれます。目につく梅や菜の花、桜、藤、ボタン、チューリップ、ハナシヨウブ、コスモスなどだけでなく、ひっそりと咲いている花たち、越谷の地名が付いたコシガヤホシクサやキタミソウなど埼玉県のレッドデータブックに絶滅危惧種として指定されている花たちも精いっぱい花を咲かせています。



レンゲソウ



ホトケノザ



フジバカマ



セリ



スミレ



シロバナタンポポ



クコ



キクイモ



ガガイモ



カラスウリ



オオジシバリ



オオイヌノフグリ



イモカタバミ



イシミカワ



アキノノゲシ



キタミソウ

埼玉県レッドデータ絶滅危惧IA類
 北海道の北見地方で最初に発見されたのでこの名がついたといわれています。
 北方系の植物で日本で見られるのは、越谷市およびその周辺と熊本県熊本市だけという珍しい植物です。越谷市では、古利根川と元荒川流域で確認されていますが、最も多く群生して見られるのは、葛西用水瓦曽根溜井です。10月と3月ごろの2回、直径2mmほどの白い可憐な花を咲かせます。



コシガヤホシクサ

埼玉県レッドデータ絶滅
 越谷市と茨城県下妻市に自生していた小さくかわいいう草です。湿地に生育するホシクサ科ホシクサ属植物で日本固有の単子葉植物です。越谷市では絶滅危惧種のこの花について富士中学校科学部の生徒たちが復活させようと栽培に取り組んでいます。



ノウルシ

埼玉県レッドデータ絶滅危惧II類
 河川敷の泥地などの湿地に生える高さ30cmほどの多年草です。茎は直立し、葉は互生し、細長い楕円形で長さ5~6cm、幅6~7mmです。4~5月に茎の先端に5枚の葉を輪生し、そこから放射状に枝を出して複数の花をつけます。葉や茎を傷つけるとウルシに似た白い汁が出て、かぶれることからこの名が付けました。



オイカワ



アオスジアゲハ



ユリカモメ



トウヨシノボリ



ギンヤンマ



マガモ



ゲンゴロウブナ



タヌキ



ハクセキレイ



カブトエビ



クロアゲハ



メジロ



キジ



ヘイケホタル



アオサギ



シラコバト

埼玉県レッドデータ絶滅危惧Ⅱ類

埼玉県の「県民の鳥」、越谷市の「市の鳥」に指定されています。一時は市内の宮内庁埼玉鴨場周辺に20数羽しかいなくなり、絶滅寸前でしたが、現在では埼玉県の東部を中心に千葉県、茨城県、栃木県などの一部にも分布しています。昭和31年（1956）1月14日天然記念物に指定されました。



アオバズク

埼玉県レッドデータ地帯別危惧

夏鳥として4月の終わりごろ日本全国に渡ってきます。県内では山地の森林や低地の市街地の神社などの大木で繁殖が確認されています。市内では、神社の社叢林や宮内庁埼玉鴨場で確認されています。巣となるうろのある大木や餌となる昆虫が減ってきていることから、子育ての場所が少なくなり、個体数の減少が心配されています。

生きもの

市内の緑道や水辺を散策するとたくさんの生きものが生息しています。カルガモやサギ、カワウ、セキレイ、シジュウカラなど…
そのほか埼玉県レッドデータブックに掲載されているシラコバトやアオバズク、カワセミなどの鳥たちとすてきな出会いがあるかもしれません。



カワセミ

埼玉県レッドデータ絶滅のおそれのある地域個体群

全国の川、湖、沼などにすんでおり、ほとんどの地域で一年中見ることができます。河川周辺の土の崖に巣穴を掘って子育てをします。一時、水の汚れや、河川改修などにより低地ではほとんど見られなくなりました。市内では、平方地区の古利根川や県民健康福祉村、大吉調節池周辺で確認されています。

みんな一緒に生きよう…

越谷の
匠の技が
生み出す美

伝統工芸

伝統持

越谷ゆかた

懐かしの
藍染め

越谷は、藍染めの型付に使うもち米の産地であり、元荒川、綾瀬川などの清流で染め上げたゆかたを洗うことができるといった好条件がそろい、藍染めゆかたの産地として知られていました。昭和30年代までは、順調に生産されていましたが、生活様式の変化とともに衰退し、現在、市内に残る藍染め工場は1軒のみとなりましたが、5月〜6月の晴れた日には、昔ながらのゆかた地の天日干しが行われます。



日光街道の宿場町として栄えてきた越谷には、流通の利便性、豊かな水や緑という特徴から江戸時代にさまざまな手工芸品が生まれました。
当時、日本の中心であった江戸から近かったこともあり、越谷の品々は評判となり、やがては全国へと名を広めていきました。その後、時代の変遷とともに多くは姿を消すこととなりましたが、越谷の手工芸品はその伝統を脈々と受け継いでいます。



伝統持

越谷ひな人形

気品あふれる
優雅な顔立ち

越谷においてひな人形が作られるようになったのは、江戸時代中期、会田佐右衛門が江戸の十軒町で学んだ人形作りを越谷に伝えたのがはじまりといわれています。それから現代に至るまでの230年間、伝統を守り、発展を続けてきた「越谷ひな」は、今では国内で有数のひな人形の産地として名を知られるま

でなっています。
越谷ひな人形は俗にいう「関東びな」に分類される作りです。特徴として気品あふれた優雅な顔立ちをしており、高い評価を受けています。また胴柄、頭、手足などすべての部品を市内で製作しています。



伝統持

越谷だるま

伝統の技法で作られる
やさしい顔立ち

江戸時代中期ごろ、従来あった「起き上がり小法師」という玩具に座禅を組んだ達磨大師を描いたのが越谷だるまの起源といわれています。以来、子どものほうそうや疫病除け、開運や厄除けとして長く親しまれてきました。

越谷だるまは、ほかの地方のものに比べて「色白」「鼻高」「福福しい」のが特徴で、越谷のみならず、川崎大師をはじめとする関東一円はもちろんのこと、日本中に出荷されて親しまれています。そのほとんどが手作業で作られています。だるまの命である「ひげ」ももちろん手描きで、製作した職人ごとに表情に個性が表れているのも特徴です。



伝統持

越谷手焼きせんべい

お米の風味と
昔なつかしい味

越谷手焼きせんべいの発祥に関しては諸説あり定かではありません。江戸時代に奥州街道沿いの茶店で売られていたことから評判となり、名物として広く知られるようになりました。越谷は古くから「江戸の米蔵」といわれ、良質な米の産地として有名だったことから、越谷せんべいが生まれたともいわれています。

特徴として、すべてが手作りであることが挙げられます。吟味された米を丹念に練り、天日で干した後、醤油を塗って一枚一枚焼き上げます。この時に用いられる醤油はそれぞれの店が独自に作っているため、店ごとの味と個性が生まれています。





越谷桐たんす

江戸の技術を
今なお受け継ぐ

越谷桐たんすの歴史は江戸時代初期から始まっています。越谷は、当時から江戸たんすの原産地として全国的に有名でした。現代においても生産量は全国有数で、国から伝統工芸品の指定を受けています。

越谷桐たんすは品質の高さでも有名です。質のよい会津桐を中心に東北六県の桐のみを使用し、選別から木取りまで一切の妥協を許しません。この質へのこだわりと受け継がれてきた職人の技こそが、越谷桐たんすの高品質の証しです。



越谷桐箱

精巧な技法が
生きています

越谷桐箱が盛んに製作されるようになったのは、江戸時代のあがる出来事を経てからになります。文化年間、当時の流行作家であった式亭三馬が「江戸の水」という化粧水を作りました。これが空前の売り上げとなりましたが、この化粧水の入ったガラスびんを入れていた桐箱のほとんどを製作していたのが越谷だったので、以来、現在に至るまで越谷桐箱はその伝統を受け継ぎつつ、独自の発展を遂げてきました。



越谷の民話

挿絵・戸井田 熙

花田のスマツカラ地蔵——船から降ろした地蔵様

昔、元荒川は、花田をぐるりと回って東小林（現在の東越谷）から瓦曾根に向って流れていました。このころは川の交通が盛んで、大きな荷物などは、みんな舟で運んだものです。

ある日のこと、一隻の船がお地蔵さんを積んで花田までやってきましたが、急に船が動かなくなってしまいました。

「お地蔵さんはここで降りたいのに違いない」船頭さんはこう考えると、お地蔵さんを降ろして花田と増林の境にあたる千間堀の近く古川の堤におまつりしました。

花田の人々は、これをスマツカラのお地蔵さんと呼んでいます。スマツカラとは、砂河原（スナカワラ）がなまったものといわれ、「スナツカラ地蔵」と呼ぶ人もいます。

このお地蔵さんの背中には、「源海の三十三回忌の供養のために造立。承応四年（一六五五）の正月二十六日」と刻んであり、今から三五〇年も前のことです。

子どもが生まれると、男の子は二十一日目、女の子は三十三日目にお宮参



足止めの狛犬——品行方正に役立った狛犬

越ヶ谷の久伊豆神社には、石で刻まれた狛犬が一对、神殿の番人のようにいかめしく空をにらんで座っています。この狛犬は享保七年（一七二二）に奉納されたものといえます。今から約二八〇年余り前になります。

悪いところへ遊びに行つてばかりいるとか、家出人で困っている家族が、この狛犬の足を麻ひもで結び、家から離れないよう願をかけると、不思議に悪いところへ遊びにいかなかったり、家出人が帰ってきたといえます。そんなところから、足止めの狛犬と呼ばれ、大そう信仰されてきました。

今でも、このようなお願いをする人がいるのでしょうか、久伊豆神社の狛犬の足は、いつでも麻ひもでしばられています。



ぎょうだいきさま——道普請の神様

蒲生一丁目のもとの日光街道の傍らに、鳥のようななつかげのような、なんとも奇妙な形をした石の塔が建てられています。土地の人は「ぎょうだいきさま」と呼んで、鷲の神様だといっています。

はてさて、なんでまたこのような奇妙なものが建てられたのでしょうか。この塔ができたのは、宝暦七年（一七五七）といえますから、今から二五〇年ほど前のことです。

これには「砂利道供養」と刻まれていて、実は宝暦七年には、日光街道の大修理があり、街道の修理完成を記念して蒲生の人々が中心となって建てたものでした。そして、道を歩く村人や旅人の道中安全を願い、「わらし」を備えてお祈りし

りをするものですが、花田では、越ヶ谷の久伊豆神社にお参りしたあと、必ずこのスマツカラのお地蔵さんにもお参りをするということ。長い年月風雨にさらされたスマツカラのお地蔵さんは、今では花田の住宅街にまつられ大きく変わりゆく越谷の姿を見守っています。

オイテケ堀——供養の後、平穩に

現在のように、上流にダムがあるわけではなく、土木工事も貧弱であった昔のことです。川の多い越谷付近では、夏から秋にかけては、大きな水害をたびたび受けたものでした。

約二二〇年ほど前の天明六年（一七八六）七月の大水も、そのひとつでした。見田方の八坂神社わきの元荒川堤防が切れて、大相模の人家や田畑が、それはもう大きな損害を受けてしまいました。

堤防の切れたところが、川底のようによくぼんでしまつて、大きな大きな内池が残り。今でもそこは、ヨシや雑草が生い茂っています。

それからのことです。日が暮れてからこの辺りを通ると、池の中から、「オイテケ、オイテケ」と悲しい声が聞こえてきます。また、ある人は、ここには大きな白い蛇が住んでいて、池のはたを通る人を水の中に引きずり込むのを見たことがあるというのです。ですから、みんなはここを「オイテケ堀」と呼んで、誰も近寄ろうとしませんでした。

ある日のこと、一人の巡礼者がオイテケ堀のそばを通りかかると、いつものように、「オイテケ、オイテケ」と悲しい声が聞こえてきて、何も知らない若い巡礼者は、あつという間に大蛇に飲み込まれてしまいました。翌日、このことを知った村人たちは、かわいそうな巡礼者のために早速ここに水神宮と弁天宮をおまつりし、池の主をなくさめました。それからというもの、白い蛇も姿を消し、「オイテケ、オイテケ」の声もなくなったということです。

水害をたびたび受けたところでは、こうした言い伝えがたくさん残っています。当時の人々が大水をどんなに恐れ、恨んでいたかを物語っているようです。

たといいます。

道中安全を願う心が、なにか人間にはない大きな力を秘めたものとして、「ぎょうだいきさま」をつくりあげたのでしょうか。「ぎょうだいきさま」は今日も、道ゆく人々を黙って見守っています。



塩かけ地蔵——子どもを守る神様

元禄年間というから、今から約三〇〇年前のこと。大沢の農家と兵衛さんの家に、次々と太った男の子が誕生したそうです。

初節句も無事にすみ、すくすくと育っていききましたが、ある日のこと、子どもたちは高い熱を出すと、そのまま意識をなくしてしまいました。若い両親は、それまで経験したことのない病気に、すっかり気が動転し、ただオロオロとすればかりです。医者よ薬よと八方手を尽くして手当てをしましたが、一向によくありません。おばあちゃんも、かわいい孫のこと、気がきではなく、あちこちの神や仏に祈りましたが、さっぱり治りません。そんなある日、近所の人がこう教えてくれました。

「大沢のお地蔵さんは、大層ご利益があるそうじゃ」

おばあちゃんはさっそく出かけて、「かわいい孫の病気を治してくれるなら、必ず塩断ちをいたします」と願かけしました。塩のない生活をするのは、大層辛抱のいることだったので

その夜のこと、お地藏さんがおばあちゃんの夢枕に立って言ったそうです。「三日三晩ののち、孫の病は治るぞや」

すると、どうでしょう。お告げのとおり孫はみるみる元気になりました。おばあちゃんは、願かけの証（あかし）として三日分の塩を持ってお礼参りに出かけた。

大沢光明院のお地藏さんに、塩を振りかけるのが習わしになったのは、それ以来のことだと思います。

今では、お地藏さんは、長い間に塩でとかされ、もとの形もわからないほどですが、それでも子どもの苦しみや悲しみが救われたためだと、醜い姿でも満足しているようにみえます。

セイケ測 — 増森のセイ魚

むかし古利根川が増森の方を大きく回して流れていたころの話です。このころは川を利用した船の交通が盛んで、増森には荷物を積み下ろしする河岸場もありましたが、ここにセイケ測というとても水の深い場所がありました。このセイケ測には大昔からここに住んでいる川の主がいて、それはそれは大きな魚であったといえます。その魚はセイ魚といいました。

ところが長い間には川の様子もだんだんと変わり、セイ魚が住んでいる深い湖も年々浅くなってきました。さすがの主も浅瀬となつては、住むことができせん。

「わしは、この増森が大好きなんじゃが、もうここには住んではおられん。兄弟のいる鐘ヶ測へいく」
こういい残して、セイ魚はとうとう古利根川下流の鐘ヶ測へ住み家をかえてしまいました。

それからのことです。古利根川を利用して江戸の間屋へ荷を運ぶとき、船が鐘ヶ測付近になるとしばしば転覆することがありました。困ってしまった増森の人たちは、額を集めてみんなで相談しました。

「なんせ転覆の事故はセイケ測にいたセイ魚が鐘ヶ測に住むようになってからに出ています。越谷の金剛寺というのは、もしかすると末田（岩槻）の金剛院かも知れません。そのころ、越谷には金剛寺というお寺はありませんでした。また戦国時代の岩槻の殿様が戦さのため特別に訓練した犬を飼っていたという話も残っていますから、このかしこい白い犬はそのころの犬と何か関係があったのかも知れません。」



左甚五郎の竜 — 一夜のうちに彫りあげた

昔むかし、日光に東照宮を建てるという將軍様のいいつけで、飛騨の国の工匠たちが大勢日光に呼び寄せられたときのことです。

ある日の夕暮、蒲生の清蔵院というお寺に一人の若者が訪れ、「日光に行く途中の者ですが、泊まる場所がなくて困っています。どうか今晩一晩泊めてください」

と、お願いするのです。お寺のお坊さんは、若者を快く泊めてやることにしました。若者は、大層うれしそうにして、何べんもお礼をいいました。そしてどうしたことか、一枚の板を貸してくれというのです。何のことかわからないまま、お坊さんは板を探して若者に渡すと、その晩はそのまま寝てしまいました。

次の朝、お坊さんが起きてみると、もう若者はいません。そのかわり、竜の彫りものをした昨日の板が、山門にかけられていました。一晩泊めてもらったお礼にと、若者が一夜のうちに彫りあげたものでしたが、それはそれは見事なもので、

だ。きっとこれはセイ魚の仕業に違いない」

「セイ魚が悲しんでいるのだ。すまないことをした」

それからというもの増森の人たちは、船で鐘ヶ測を通るときセイ魚にあいさつして通ることにしました。

「おれは増森の者だよ。これは増森の船だよ。セイ魚よ、堪忍だよ。悪さしないでくれ」

こうして大きな声をかけながら進むと、それからは無事に通ることができたというから不思議です。

その後の時代のことですが、古利根川には新しい川筋が掘られ、セイケ測は開墾されて田んぼになりました。今ではこの田んぼも埋め立てられてしまいました。

かしこい犬 — 大評判の二匹の白い犬

昔、越谷の金剛寺という寺に二匹のかしこい犬がいたということでした。

金剛寺の住職が、江戸の本所（現在の墨田区）にある本寺（支配寺）に手紙を出すときは、いつも二匹の白い犬に行かせました。一匹の犬の首に手紙を結びつけ、もう一匹の犬に二〇〇文の銭を結びつけて使いにい出してやると、足の早い犬で、四時間ほどで用をたして帰ってきました。

ちゃんと道順を知り、ちゃんと用たしをして帰ってくるのですから、たいしたものです。使いにい出す前日には、「明日は江戸へ用たしにいってくるんだよ」と、よくいい聞かせ、当日は二升のご飯を与えます。二匹の犬は一升ずつ食べ終えると、まっすぐ本寺へ駆けつけました。本寺では犬が到着すると、早速ご飯を炊いて与えます。そして犬がご飯を食べている間に返事を書き、犬の首にこれを結びつけて帰してやります。

犬は一もくさんに帰ってくるのですが、途中一度だけ蒲生の酒屋に立ち寄ります。酒屋の主人は、犬を見ると、首に結んである二〇〇文の銭を受け取り、そのかわりに二升のご飯を炊いて与えるのがならわしになっていました。二〇〇文は、そのための代金でした。

この話は、「潭海」（たんかい）という寛政七年（一七九五）に書かれた本の中

まるで竜が生きているように見えます。

それからいく日かしてのことです。夜になると決まって、村の田んぼや畑が荒らされてしまうのです。お百姓さんにとって、一生懸命耕した田畑がメチャメチャにされてはたまりません。村人は相談して、一晩中交替で見張りを立てることにしました。

ところがどうでしょう。毎晩田畑を荒らすのは、お寺の門の額から抜け出した竜の仕業だったので。

次の日、早速村人たちはお寺に詰めかけ、竜が抜け出さないようにと釘を打ち込んで両方の眼をつぶしてしまいました。

これでもう安心して眠れると思ったのもつかの間のことでした。夜になると今度は、田んぼに大きな穴が開けられていました。作物を荒らしまわったあととは、前よりもひどいものです。困ってしまった村人たちが、何とかしてくれとお坊さんに頼みこむと、お坊さんは、竜の額に金網の囲いをして、両眼の釘を抜いてやると、

「竜よ、村人たちが困っている。作物を荒らしたりしてはいけませんよ」と、優しく語りかけてやりました。それからというもの、竜はおとなしくなったというのです。

この竜を彫った若者は左甚五郎という人だったといわれていますが、左甚五郎の彫った竜や虎が、夜になると抜け出して、田畑を荒らしまわるといいう話は、ほかにもたくさんあります。しかし、どうして左甚五郎の竜や虎は村人たちに迷惑をかけるようなことをするのでしょうか。そのことについては残念ながら伝わっていません。

